

短 報

「きぼうときずなプロジェクト」  
聖路加看護大学福島県災害支援プロジェクトの中間活動報告

田代 真理<sup>1)</sup> 有森 直子<sup>1)</sup> 大橋 明子<sup>2)</sup> 大畑 美里<sup>1)</sup> 實崎 美奈<sup>1)</sup>  
高橋 恵子<sup>1)</sup> 本田 晶子<sup>1)</sup> 八重ゆかり<sup>1)</sup> 山田 雅子<sup>1)</sup> 井部 俊子<sup>3)</sup>

**Hopes and Connections Project:  
The Interim Report on Support for Disaster Victims in Fukushima Prefecture  
by St. Luke's College of Nursing**

Mari TASHIRO, RN, MS<sup>1)</sup> Naoko ARIMORI, RN, DNSc<sup>1)</sup>  
Akiko OHASHI, RN, MS<sup>2)</sup> Misato OHATA, RN, MS<sup>1)</sup>  
Mina JITSUZAKI, RN, MS<sup>1)</sup> Keiko TAKAHASHI, RN, MS<sup>1)</sup>  
Akiko HONDA, RN, MS<sup>1)</sup> Yukari YAJU, RN, MPH, Ph.D<sup>1)</sup>  
Masako YAMADA, RN, MS<sup>1)</sup> Toshiko IBE, RN, DNSc<sup>3)</sup>

[Abstract]

Since April 2011, a month after the March 11 Great East Japan Earthquake, the Research Center for the Development of Nursing Practice at St. Luke's College of Nursing (SLCN) in Tokyo has been involved in the "Hopes and Connections Project" to support disaster victims in Fukushima Prefecture.

The "Hopes and Connections Project" was launched by the nonprofit organization Japan Clinical Research Support Unit, with the cooperation of SLCN.

Areas in which the project is active are Iwaki, Soma and Koriyama cities in Fukushima Prefecture. One or two nurses associated with SLCN have been sent to each city on a continual basis. A total of 363 nurses had been sent to these cities as of August 31, 2011.

The nurses working in Iwaki are providing nursing care in evacuation centers and visiting homes in disaster-stricken areas to assess the needs of residents and engage in supportive activities. In Soma, nurses are providing assistance to the activities of a mental health care team and helping to work toward the systematization of community mental health in the area. In Koriyama, nurse volunteers are visiting the temporary housing facilities of evacuees from the town of Tomioka, which is located within the 20-kilometer radius of the Fukushima No. 1 nuclear power plant. Consequently every household in Tomioka was ordered to evacuate due to the threat of exposure to radiation. The present report covers project activities from April 1 to August 31.(235)

[Key words] Great East Japan Earthquake, support for disaster victims, Hopes and Connections Project

[要旨]

聖路加看護大学看護実践センターでは2011年3月11日の東日本大震災の後、NPO法人日本臨床研究支援ユニットが立ち上げた東北地方災害支援のための「きぼうときずなプロジェクト」に賛同し、福島県災害支援プロ

1) 聖路加看護大学 看護実践開発研究センター St. Luke's College of Nursing, Research Center for Development of Nursing Practice  
2) 聖路加看護大学 精神看護学 St. Luke's College of Nursing, Psychiatric & Mental Health Nursing  
3) 聖路加看護大学 看護管理学 St. Luke's College of Nursing, Nursing Administration

プロジェクトに4月から取り組み始めた。活動地域はいわき市、相馬市、郡山市で、各地域に聖路加看護大学と縁のある看護師や保健師を1～2名ずつ派遣した。8月31日までの派遣者は363名である。

いわき市では市の保健師と連携・調整のもと、避難所における看護、被災住宅の戸別訪問を通して住民ニーズを把握し、支援活動にあたった。

相馬市では福島県立医科大学の心のケアチームを支援し、地域の精神医療のシステム化に向けたサポートを行った。

郡山市では福島第一原発20km圏内で町ごと避難している富岡町に対して、仮設住宅の戸別訪問やその後のフォローを行った。

今回は8月31日までのプロジェクトの活動報告を行うこととする。

【キーワード】 東日本大震災、災害支援、きぼうときずな

表1 活動概略

|      |   |
|------|---|
| いわき市 | いわき市保健所の保健師との連携・調整のもと、市内避難所における看護、被災住宅の戸別訪問を通して住民ニーズを把握し、支援する。                      |
| 相馬市  | 福島県立医科大学の心のケアチームを支援し、相双地区における精神医療のシステム化にむけたサポートを行う。                                 |
| 郡山市  | 富岡町保健師との調整で、巨大避難所で暮らす人々が円滑に二次避難所に移動することができるよう支援するとともに、仮設住宅などの戸別訪問によるその後のフォローを行っていく。 |

## I. はじめに

2011年3月11日14時46分に日本を襲ったマグニチュード9.0の巨大地震は、千葉県以北の太平洋側ほぼ全域に未曾有の被害をもたらした。特に福島県は、地震、津波、原子力発電所の事故と3重の被害に見舞われた。その上、放射線に関連したさまざまな風評も影響し、他県からの支援を受けにくい状況にあった。聖路加看護大学として何かできることはないかと考えていた時、NPO法人日本臨床研究支援ユニット（理事長大橋靖雄 東京大学医学部教授）が立ち上げた東北地方災害支援のための「きぼうときずなプロジェクト（以下、「きぼうときずな」）」と出会った。「きぼうときずな」のミッションは「支援活動を通じた被災住民のニーズの把握と行政への反映、健康維持・増進のための情報提供はいかにあるべきかの試行と評価、避難所から仮設住宅まで継続して行う看護活動を通じ今後の高齢者健康対策に提言を行う」ことであった。私たちはその活動趣旨に賛同し、2011年4月より研究センター事業として、福島県災害支援プロジェクトに取り組み始めた。ここでは活動開始から2011年8月末日までの当プロジェクトの活動について報告する。

## II. 活動概要

### 1. 活動地域と参加者

4月以降8月末までの活動地域はいわき市、相馬市、郡山市である。NPO法人日本臨床研究支援ユニットおよび聖路加看護大学福島県災害支援プロジェクトの担当者が、いわき市と相馬市については4～5月、郡山市については5～6月にかけて複数回現地入りし、現地保健センターの保健師などと活動内容や派遣スケジュールの調整を行った。そして、いわき市では4月29日、相馬市は5月7日、郡山市は6月9日より、聖路加と縁のあ

る看護師・保健師の派遣を開始した。活動概要は表1に示す通りである。

派遣者募集の広報は、教員・院生・本学認定看護師教育課程修了生への口頭及び電子メールでの呼びかけ、同窓会への案内状の送付、第16回聖路加看護学会学術集会で活動報告時の協力依頼などによって行った。その結果、全国各地から本プロジェクトの趣旨に賛同し、参加協力の意思表示をする者が手を挙げ、仕事の調整を行いながら本学の教員は出張扱いとして、大学院生は指導教官と相談の上、その他の者は休日や有給休暇を利用して、現地での支援活動に参加した。本学教員、大学院生は「出張届」や「福島県災害支援プロジェクトボランティア活動届」を総務課に提出し、大学の活動の一環として本プロジェクトを遂行していく体制を整えた。また、参加者には傷害保険や看護師損害賠償保険への加入を勧め、看護専門職の研修補償制度「will & e-kango」への加入が可能となる環境を整えた。参加者は日帰りであったり、数日間泊まり込みであったり、参加日数は個人の状況に合わせて調整した。

また、活動後はサポートグループの会を開催し、本学精神看護学研究室の教員が中心に派遣者のメンタルケアを行った。交通費や宿泊費、現地での活動費は「きぼう



写真1 ペ・ヨンジュン氏寄贈の支援車前にて

ときずな」から全面的な経済支援を受けることができたため、参加者は安心して現地に赴くことができた。また、ペ・ヨンジュン氏寄贈の支援車（写真1）に乗って活動を行う中で、被災者の方々だけでなく、現地で会って寝食を共にする同窓生などとも聖路加チームとして、新たなきずなが生まれていった。

本プロジェクトへ参加の意思表示をし、派遣者リストに登録した看護師・保健師は8月末時点で75名（本学教員15名、本学大学院生18名、同窓生21名、本学認定看護師教育課程修了生11名、その他10名）である。この中から1日あたり平均2名（相馬市は1名）を表1のそれぞれの地域に派遣した。8月末日までの派遣状況は表2の通りである。

表2 派遣者延べ人数（人・日） 2011年8月31日現在

|      | 5月   | 6月 | 7月  | 8月  | 合計  |
|------|------|----|-----|-----|-----|
| いわき市 | 67   | 44 | 60  | - * | 224 |
| 郡山市  | - ** | 10 | 36  | 48  | 123 |
| 相馬市  | 24   | 35 | 20  | 19  | 98  |
| 合計   | 91   | 89 | 116 | 67  | 445 |

\* いわき市の都合により活動一時休止

\*\* 6月末より活動開始した

8月末で活動をいったん終了

## 2. 各地域での活動の実際

### 1) いわき市

4月末より市の保健師に協力する形で、避難所での支援活動を始めた。避難所での支援活動では、他県からもたくさんの支援チームが集まっており、どのような支援が必要か手探りの中、話し合いを繰り返しながら活動にあたった。聖路加チームの名札をつけていると「聖路加の看護師さんですか、この前も別の人が親切に話を聞いてくれて」といった声が聞かれた。継続的に関わっていくことの必要性がカンファレンス等でも確認された。次いで、被災沿岸部の家庭訪問と健康調査（写真2）、そして市の一時提供住宅（仮設住宅・民間アパート、雇用促進住宅）の訪問へと活動は移っていった。8月末には



写真2 被災沿岸部の戸別訪問（いわき市）

避難所はすべて閉鎖され、約1,700世帯が市の一時住宅への入居手続きを終了していた。聖路加チームは、大分県や高知県、延岡市などのチームと分担して、入居世帯調査票にそって聞き取り調査をしながら戸別訪問を行った。聞き取り調査の主な項目は、仮設住宅入居日、連絡先、家族構成、健康状態、経済状況、震災の影響、交友関係である。訪問時に不在の家も多く、2巡、3巡と訪問を実施した。

5～6月の主な支援場所であった体育館等の避難所では集団生活のため、風邪、下痢などの予防が重要だったが、仮設住宅など個別の生活に移ってからは、人々のコミュニティ作りを支援することも意識しながら訪問を続ける必要があった。戸別訪問によって得られた入居世帯調査票のデータをもとに、要継続支援者を保健師と一緒にピックアップした。さらに不在のため未面談の世帯の中から、健康障害のリスクが高いと考えられる世帯として40歳以上の独居男性、高齢の親と独身息子世帯、シングルファーザー/マザーを継続フォローにつなげた。今後は、これら要継続支援ケースを、地区保健福祉センター・地域包括支援センター・社会福祉協議会など既存の組織・事業へつなげるとともに、地区ごとに行われている被災者を対象とした交流会で、健康相談・血圧測定の実地支援活動を行っていく予定である。

### 2) 相馬市

福島県相双地域は福島県浜通りの中北部に位置し、太平洋と阿武隈高原に囲まれた自然豊かな地域である。この地域には、相馬市、南相馬市、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、新地町及び飯館村が含まれる。また、相馬港、南北には常磐自動車道、国道6号、常磐線が整備されており、首都圏との主要な交通網となっている。しかし、2011年3月11日の大震災に伴い、この地域の沿岸部は大きな被害を受けた。また福島原子力発電所の事故により、南相馬市の一部、波江町の一部、双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町の一部が警戒区域となり、また飯館村や葛尾村あるいは警戒区域周辺の地域も計画的避難区域や緊急時避難準備区



写真3 南相馬市の警戒区域

域として設定された。常磐線等の交通機関も不通となった。

相双地域の北部に位置する相馬市および新地町は、1880年頃に起きた相馬事件の影響により、震災以前から精神科病院のみならずクリニックや総合病院での精神科外来が存在しない。精神疾患をもつ多くの患者は、南相馬市にある診療所や病院、または常磐線を利用して仙台などの診療所や病院にて治療を受けていた。しかし震災によって南相馬市の病院が警戒区域となり、緊急時避難準備区域に位置する他の病院は6月より週2日の治療を行うのみであり、この地域の多くの患者が治療を継続していくことが困難な状態となった。このような精神科医療の空白を埋めるために、福島県立医科大学医学部精神医学講座および看護学部家族看護学部門の有志からなる心のケアチームが活動を開始し、また全国から集まったボランティアの医療職者と共に外来診療や避難所等への訪問を開始した。

この心のケアチームに参加するため、主に本学精神看護学領域の教員・大学院生・卒業生らを2011年5月7日から8月31日まで派遣した。一人あたりの派遣期間は5～6日間とし、18期間、実日数96日（延べ100日）にわたり支援活動に参加した。派遣者数は、実人数15名（延べ18名）であった。主な活動は、現地の人材や支援活動のコーディネーターをサポートすることであり、ケアチーム内の調整や被災現場とケアチームの連絡調整なども行った。さらに、避難所訪問（6月まで）、居宅訪問、仮設住宅への訪問、仮設住宅集会所での活動、職員検診（消防職員等）の補助等にも参加した。

支援活動中に、余震や天候の不順、入院を要する精神症状を持った方の緊急対応などを行ったが、各支援者はそれぞれの専門性を生かして対処し、無事に活動を遂行することができた。また支援者らは、現地での精神保健、看護活動を通して、被災者の心の問題は、被災体験からの影響だけではなく、それまでに潜在していた問題が被災によって顕著化すること、震災、津波、放射の被害等の複雑な問題に対する、より長期的かつ地域に根差した



写真4 健康サロンの様子（郡山市）

生活再建への支援と心のケアの必要性があること等を学び得ることができた。さらには、支援者へのメンタルケアの必要性と有効性についても当事者として体験し、被災地での心のケアについて考える機会を得た。

### 3) 郡山市

巨大避難所（ビッグパレットふくしま）に原発周辺地域の住民が最高で約2,500名避難していた。当プロジェクトは福島第一原発20km圏内で、町ごと避難している富岡町民への支援を行うこととなった。ビッグパレットふくしまでの健康相談に始まり、富岡町の保健師の指示のもと新潟県柏崎市、滋賀県湖南市の保健師チームらと協働しながら、仮設住宅の戸別訪問を行った。対象仮設住宅は緑が丘（169戸）、富田町（287戸）、大玉村（630戸）である。戸別訪問では、仮設住宅への新規入所者を訪問し、所定の調査票の内容について聞き取り調査を実施した。調査項目は富岡町住所、仮設住宅入居日、連絡先、家族構成、経済状況、震災の影響、交友関係であった。不在宅には訪問を繰り返すとともに、訪問によって継続支援が必要と判断した者のフォローを行った。

仮設住宅では、それまでは農業を営み、庭付きの家屋に住んでいた被災者が、「こんなウサギ小屋みたいなどころにいつまでいればいいのか」「畑をやっているが、放射線の影響はどうなのか」と、全く違った環境に不安を訴える場面も数多く見られた。環境の変化に伴い、運動不足によって足腰が弱まったり、隣近所と面識がないため孤独で楽しみのない生活を送っていたり、さまざまな健康障害のリスクを被災者は抱えていた。そのような中、私たちが訪問をすると、お茶を出しながら30分近く話をし、「聞いてもらって楽になった」と笑顔を見せる被災者にも大勢出会えた。町民からの要望もあり、仮設住宅に引きこもらないため、住民が自主的に参加できるように「健康サロン」を7月下旬から開催した（写真4）。「健康サロン」は各仮設住宅の集会所で週に1回開催することとし、ミニ講座等を行った。テーマは「お口の体操」や「脱水予防」「健康体操」「レンジの使い方」など状況に応じてさまざまであった。参加者の健康相談、血

圧測定等に加えて体操や健康ミニ講座は他県からの保健師チームと協働で実施した。現地の生活支援相談員や県の栄養士らと横の連携を持ちながら、孤独死を含む震災関連死の予防、高齢者などの生活支援に取り組んだ。今後は、健康サロンの運営を地元の住民に任せ、借り上げアパートへの戸別訪問や、10月には仮設住宅に診療所ができるため、連携を図りながら、健康課題への支援をしていきたいと考えている。

### 3. 活動を通して

われわれが支援している福島県いわき市、相馬市、郡

山市では、避難所から仮設住宅や借り上げ住宅への移動など、被災者の生活状況は刻々と変化している。それに伴いニーズも変化しており、現地保健師と相談しつつ、新たなニーズに対応していく必要性を感じている。8月までは他県のチームと協働しながらの支援活動を展開してきた。しかし、他の支援チームは9月以降はほとんど撤退予定である。被災者からは「まだまだ大変なんです。聖路加チームさんはまだ来てくれるのよね」との言葉も聞かれており、長期にわたる継続的なケア提供の重要性を考え、本プロジェクトは2012年3月までの1年間は継続する予定である。